

『莊子』より

「逍遙遊篇」

北冥に魚有り、その名を鯤という。鯤の大なる、その幾千里なりや知らず。化して鳥と為り、その名を鵬と為す。怒して飛べばその翼、垂天の雲の若し。この鳥や、海運るとき、すなわちまさに南冥に徒る。南冥とは天池なり。

齊諧は、怪を志る者なり。諧の言に曰く、鵬の南冥に徒るや水に撃つ（羽ばたく）こと三千里、扶搖（旋風）に搏ちて上ること九万里、去りて六月をもって息する者なり、と。

野馬（陽炎）なり。塵埃なり。生物の息をもって相吹くなり。天の蒼蒼たるはその正色なるか。その遠くして至極するところなし。その下を視るや、またかくの若きのみ。

且つそれ水の積むや厚からざれば、すなわち大舟を負うに無力なり。杯水を坳堂（床の窪み）の上に覆せば、すなわち芥これ舟となる。杯を置きてすなわち膠す（くつつく）、

水浅くして舟大なればなり。風の積むや厚からざれば、すなわちその大翼を負うに無力なり。故に九万里、すなわち風はこれ下にあり。しかるのち、すなわちいま、まさに南に凶る。

蜩（せみ）と鸞鳩（こぼと）、これを笑って曰く、我ら決起して飛び、榆枋（にれの木、まゆみⅡ檀の木）に止まるも、時にすなわち至らずして地に控るのみ。なにをもってか、この九万里を行き南せん。

莽蒼（近郊の野）に適く者、三餐して反る。腹なお果然（満腹）たり。百里に適く者、宿に（前の晩）糧を舂く。千里に適く者は三月糧を聚む。この二虫、またなにをか知らんや。

小知は大知に及ばず、小年（短い寿命）は大年に及ばず。なにをもってその然るを知るや。

朝菌は晦朔（朝と晩）を知らず、蟪蛄は春秋（年月）を知らず、これ小年なり。楚の南に冥靈なるもの（樹木）あり、五百歳をもって春と為し、五百歳をもって秋と為す。上古大椿あり、八千歳をもって春と為し、八千歳をもって秋と為す。これ大年なり。しか

るに、彭祖（伝説の長寿者）すなわちいま久しきをもってひとり聞こえ、衆人これに匹せんとす、また、悲しいかな。

湯（殷の初代王）の棘きよくに問うやこれのみ。窮髪きゆうはつの北（極北の不毛の地）に冥海めいかいなる者あり。天の池なり。魚あり。その広さ数千里。未だ長さを知る者あらず。その名を鯢すいと為す。鳥あり、その名を鵬たうざんと為す。背は泰山たいざんの若く、翼は垂天すいてんの雲の若し。扶搖ふぎょうに搏はくち、羊角ようかくして（旋風を起して）上ること九万里、雲氣うんきを絶ち、青天を負い、然るのち、南はかを図り、まさに南冥に適あかんとす。斥鷃せきあん（うずら）これを笑いて曰く、彼まさにいづくに適あかんとするや。我騰躍われとうやくして上るも、数仞すうじん（七、八米）を過ぎずして下り、蓬蒿ほうこう（よもぎ）の間に翱こう翔しょうす（飛び回る）。これもまた飛ぶことの至りなり。しかるに、彼まさにいづくに適あかんとするや、と。これ、大小の弁べんなり。

故にかの知は、一官に効あり。行いは一郷に比い、徳は一君に合して、一国に徴めさるる者の、そのみずから視るや、またかくの若し。

而して、宋榮子そうえいし、猶然ゆうぜんとしてこれを笑う。かつ世を挙げてこれを誉ほむれども、勸すすむるを加えず。世を挙げてこれを非そしれども、沮はばむを加えず。内外の分を定め、榮辱えいじよくの竟きようを弁べんずる、これのみ。彼、その世において、未だ数数然さくさくぜん（さばさば）たらざるなり。然りと言えども、なお未だ樹たたざるものあり。

かの列子れつしは風きよに御ぎよして（操さくつて）行き、冷然として善し。旬有五日じゆんゆうごにちにしてのち反かえる。彼福を致いたす者において、未だ数数然さくさくぜんたらざるなり。これ、行くを免まぬかるといへども、なお待つところの者なり。

かの天地の正せいに乗りて六氣りくきの変へんを御ぎし、もつて無窮むきゆうに遊ぶ若きは、彼まさにいづくにか待まちたんとする。故に曰く、至人しじん（道を得た人）は己おのれ無く、神人しんじん（靈妙な能力を持つ人）は功無こうく、聖人（最高の境地にあらうとする人）は名無なし、と。

「齊物論」

昔、莊周、夢に胡蝶こてつと為る。栩栩然くくぜんとして（ひらひらと舞い）胡蝶こてつなり。みずから愉たのしみて志しに適あえるか、周ならざるを知らざるなり。俄然がぜんとして覚さむれば、すなわち遽然きよぜんとして周なり。知らず、周の夢に胡蝶と為るか、胡蝶の夢に周と為るか。周と胡蝶とには、すなわち必ず分ぶんあり。これを物化と謂いう。